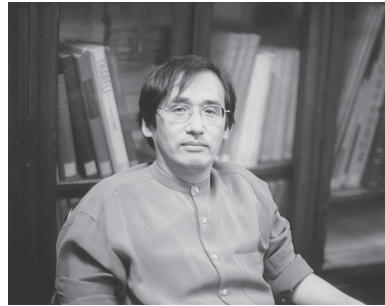


## 高田時雄教授の學問

### 主要な學術上の業績

京都大學名譽教授高田時雄氏は、中國語を中心とした言語史研究および敦煌寫本を中心とした文獻研究において、數多の重要な研究成果を刊行し、その學問と學界への多大な貢獻は、國內外において高く評價



されてきた。高田教授は中國のさまざまな時代と地域で記録された多様な寫本や刊本資料を、言語學と文獻學の方法を驅使して分析し、精緻な論證を積み重ねて、文獻が記述された當時の言語狀況とその史的背景の諸相を明らかにしてきたのみならず、長年にわたり優れて斬新な見解を世に問い續けている。

ひとくちに中國語史と言ってもその研究範圍は廣い。長い書記の傳統をもつこの言語の歴史は、單に時系列においてその發展を辿るだけでもたいへんなことであるが、さらに緯糸として地域的多樣性を追求しようとすれば、ことはいつそう厄介なことになる。傳世の寫本にせよ出土資料にせよ、その文字資料に記載された内容を讀み解くことはできても、その資料を制作するために使われていた言語そのもの、および言語社會のありようを知るのは容易ではない。いかなる言語も個々の話し手と社會から切り離して考えることはできない以上、中國語史では中國という土地に生起した言語史的事實のすべてが俎上に載せられるべきである。かかる構想のもとに高田教授は、さまざまな資料を驅使して、人間社會の具體的生活を背景にもった中國語史を鮮やかに構築して見せた。以下に高田教授の學術上の業績を簡潔に紹介したい。

高田教授の主たる研究分野は、敦煌寫本の言語史的研究である。敦煌遺書には漢文寫本のみならず、チベット語、コータン語、ウイグル語などをはじめとする各種の言語によって書かれた寫本が大量に含まれている。これらの諸言語は、多かれ少なかれかつて敦煌周邊で行われたものであり、この地域の言語社

會の具體相を解明する上で極めて貴重な材料でありながら、相互の密接な關連において研究されることは稀であつた。それはひとえにかかる研究の推進のためには、漢文文獻は言うに及ばず、中央アジアの諸言語に通じていなくてはならないことによるが、高田教授はその卓越した語學力を驅使して、9・10世紀の敦煌が多言語社會であるとする觀點から、漢文寫本を中心に据えつつ他の胡語寫本を大量に援用し、総合的に言語社會の諸相の解明をすすめてきた。

また敦煌寫本には漢籍をはじめとして歴史書、佛教その他の宗教文獻、契約や貸借の世俗文書など、當時の學問と社會生活とに關わるあらゆる文獻が含まれる。したがってその解讀と分析には、文獻學、言語學、歴史學、宗教學、といった多様な分野にわたる廣範な知識が求められる。高田教授は主專攻である言語史研究を中心に据えて、これら多様な學問分野に分け入り、極めて高い見識をもって各分野の知識を統合し、從來の中國學の立場からは周邊的な資料として扱われてきた胡語文獻を活用して、敦煌寫本と敦煌社會の複雑な言語狀況に新たな知見と新しい枠組みを提示し、研究の大きな指標を築いた。東アジアの學問の傳統に立ちつつ、ヨーロッパの文獻學と東洋學に精通した研究手法は、廣範にして深い研究成果を生み出し、前人未到の知の領域を開拓した。高田教授の研究の獨創性は、精緻に發達した傳統的な中國音韻學の學問を繼承しつつ、日本の東洋史研究の傳統のうえに、ヨーロッパの文獻學と東洋學の視座を極めて高度な次元で融合させた研究手法から導き出されたものであつて、餘人の追隨を許さぬ地平を拓いたといふことができるだろう。

## ■藏漢對音資料の研究

高田教授が獨自の文獻言語學的方法論をもって中國語史研究に與えたインパクトの第一は、敦煌發見のチベット文字で漢文文獻の讀音を寫した一連の「藏漢對音資料」を仔細に検討し、當時の言語狀況を分析した研究である。その集大成として世に問われたのが、著書『敦煌資料による中國語史の研究——九・十世紀の河西方言』（創文社、1988年）であつた。本書は高田教授の學位請求論文をもとに加筆訂正のうえで公刊されたもので、「藏漢對音資料」に關する過去の研究すべてについて、ロンドンとパリに所藏される敦煌文獻の一次資料を精

査して仔細に検証し直すとともに、新資料の解讀と分析を加えて全面的な再整理を行なっている。中國語音韻史の研究方法を縦軸に、文獻研究による實證を横軸に展開された本書は、敦煌地方における九・十世紀の河西方言の様相を総合的に復元したまさに劃期的な研究である。

漢文文獻は基本的に漢字で記録された規範化された文語であり、過去の中國語の音韻・語彙・語法を明確に伝える資料は意外に少ない。傳統的な中國語音韻史研究においては反切や音註を整理して區別される發音を、切韻系韻書の韻類に照らして分合を分析する手法が主として用いられ、くわえて外國借字音資料が音價推定の補助材料として使われてきた。高田教授は敦煌文獻中の漢文の音註資料に加え、民族文字による音寫資料を精密に分析して資料の層別を明らかにし、敦煌地域に行なわれていた9・10世紀の河西方言の音韻體系の復元を試みた。あわせてチベット語およびコータン語との對譯會話例文集を分析して、當時の口語文法的一端を解明している。

藏漢對音資料の総合的な先行研究には、羅常培の《唐五代西北方音》(中央研究院, 1933年)があるが、扱った資料が限定されていたために、資料間の性質の相違を十分に把握できず、現代西北方言との繼承關係を想定した比較を試みていた。高田教授は羅常培が利用し得なかったフランス國立圖書館所藏の新資料を加え、合計14種類の藏漢對音資料を校訂して分析し、ラサの唐蕃會盟碑の刻文に見られる人名・地名・官職名などの對音を指標として、その音韻特徴から唐代長安音により近い第一種と、すべての全濁聲母に無聲化が見られ、三等韻重紐A・Bの區別がA類に合流し、宕・梗攝における鼻音韻母が消失するなどの特徴が顯著になる第二種とに類別した。

資料の層別に關するこうした見解は、河西地方の言語史における重要な發見である。敦煌を中心とする河西地方では中國語西北方言を基礎とした言語が日常的に使用されていたが、唐代には首都長安の言語規範が強い強制力を伴って持ち込まれ、行政・教育・宗教などあらゆる局面にこの規範がはたらいていた。しかし吐蕃支配期を経て規範意識が稀薄となり、實質的な獨立國家であつた歸義軍政權下では土著の語音が規範に取って代わり、標準としての地位を獲得した。資料に見られる層別は、こうした言語の歴史的背景を反映したもので、高田教授は第一種の資料が本質的には唐代標準音の反映であり、第二種は

歸義軍期に權威を獲得した土着の方言であったことを闡明し、後者を河西方言と命名した。加えて古代の河西方言は同地域に今日話される現代方言とは繼承關係がなく、これまでの研究が西北方言という地域的な枠組みを設けて兩者に共通性を見いだそうとした方法を批判している。

精密な資料分析に基づく河西地方の言語史のダイナミズムの解明は、斬新かつ説得的であり、中國語史のみならず、敦煌學および内陸アジアの言語史研究に大きな影響を與えている。昭和63年度（1988年）には『敦煌資料による中國語史の研究』に對して第16回金田一京助博士記念賞が贈られた。

上掲の研究によって現存する藏漢對音資料のほとんどについてテキストの復元が完成したものの、「長卷」と呼ばれるやや大部の音寫本が、未解讀のまま残されていた。漢字の傍にチベット文字で音を註記した「音註本」とは異なり、「音寫本」はチベット文字で音が記録されているだけであつて、漢字の記載がない。音寫本研究の第一歩であり、しかも最大の困難は、元の漢文テキストの精確な同定にある。これはあたかも讀誦用のカタカナによる読みかただけが記された佛典から、もとの漢文の經文を復元する作業に似て、その難しさは想像に餘りある。「長卷」は、W. サイモンがその一部を解讀し漢文を同定してはいたが、文書全體にわたる原文の同定と復元には遠く及ばなかった。高田教授は、『敦煌資料による中國語史の研究』で復元した河西方言の音韻體系および一連の藏漢對音資料の對音データに照らして、膨大な敦煌文獻を博搜し、散在する情報を丁寧に収集した結果、「長卷」が單一の經典ではなく、いくつかの經典のテキストの一部を綴り合わせたものであることを明らかにし、全文の漢文テキストを同定して字句の異同についても精密な考證を行なった。その前人未到の研究成果は「チベット文字書寫「長卷」の研究（本文編）」（『東方學報』65冊、1993年）に見ることができる。

## ■ウイグル字音の研究

高田教授の第二の大きな研究テーマに、中央アジアの言語交流の實像の解明がある。9世紀になるとモンゴリアを逐われたウイグル族が、中央アジアのトルファン盆地に據點を移して高昌ウイグル王國（西ウイグル國）を建設した。

この國では13世紀にモンゴルによって征服された後も、明代に至って次第にイスラム化が進行するまで、長きにわたり佛教を中心とする特色ある文化を保持した。ウイグル人は當時、ソグド人から借用したシリア系の文字を用いて自らの言語を書き記すと同時に、トルファン地区における漢字文化の傳統も繼承していた。その結果、日本漢字音・朝鮮漢字音・ベトナム漢字音と同様のウイグル獨特の漢字音を成立させ、ウイグル独自の傳承音で漢字を讀んでいた。高田教授は、「ウイグル字音考」（『東方學』第70輯，1985年）および「ウイグル字音史大概」（『東方學報』第62冊，1990年）といった一連の研究において、はじめてウイグル字音の存在を指摘し、その實體を具體的に明らかにした。その字音の特色は、中國西北部の河西方言の發音を基礎としつつ、それをウイグル語の音韻體系に適應させたもので、聲調の區別をもたず、音節初頭子音や韻母も非常に簡略化されたものであった。この研究はのちに古代テュルク語の研究者にも啓發を與え、日本の漢字假名交じり文にも似た漢字ウイグル文字混じり文資料の發掘や、日本で行なわれた「文選讀み」によく似た、漢字の音讀と訓讀を併用する讀み方の存在が明らかにされるなど、關連領域であるアルタイ言語學、および日本語學へ與えたインパクトは極めて大きなものであった。高田教授の論文「ウイグル字音考」およびそれに關連する研究は、西域に傳わった漢字文獻と傳播した字音の諸相を明らかにし、西域の歴史と言語文化の理解に新たな地平を拓いたものとして高い評價を得、昭和61年度（1986年）に第5回東方學會賞を受賞した。

## ■コータン語と河西方言

河西方言研究のいまひとつの重要な資料として高田教授が着目したのは、コータン語による于闐文書であった。コータンは唐代の中國では于闐と書かれた西域南道沿いのオアシス都市國家で、イスラム化以前の當時は佛教が榮えていた。漢語とコータン語との交流を示す資料としては夙にブラーフミー文字で音寫した漢文金剛經が知られており、『敦煌資料による中國語史の研究』でも關連資料として使用されている。高田教授はさらに、「コータン文書中の漢語語彙」（『漢語史の諸問題』京都大學人文科學研究所，1988年）において、敦煌文獻

に含まれる于闐文書を博搜精査し、于闐文中に含まれる地名・官職名・人名等の漢語語彙を抽出してその音韻を分析した。本論考は、河西方言の中央アジアへの浸透を論じた雄編である。

高田教授が調査した于闐文書は40點に及び、抽出された漢語語彙は89項目を数える。高田教授はすべての項目に詳しい考證を行なって音寫された語彙を同定するとともに、金剛經の音寫システムを参照して、これらの漢語語彙の音韻學的分析を行なった。その結果、于闐文書中の漢語語彙は音寫本金剛經と同じ漢語方言に基づいていることが明らかとなり、于闐文書が時期の異なる多くの人の手によって書かれた文獻であること、また含まれる漢語語彙は日常的に使われていた語であることから、河西方言が于闐地域にまで廣く浸透していた證左であると結論づけている。

## ■言語生活の諸相の研究

さらに文化接觸の場において河西方言の浸透に関わる言語交流と多言語生活の実體を明らかにした論考がある。敦煌での状況については *Multilingualism in Tun-huang*. (*Acta Asiatica* 78, 2000.) およびその中國語版の〈敦煌發現的多種語言文獻〉(《敦煌學與中國史研究論集——紀念孫修身先生逝世一周年》甘肅人民出版社, 2001年) で詳説し、同様にトルファンでの状況については「漢字の西方波及」(『漢字文化三千年』臨川書店, 2009年) で論じている。以上2編は周邊地域への漢字文化の浸透についての總論であり、言語交流の全貌を描寫して提示した。文獻記録からその文獻が記録された當時の言語生活を再構築する手法は高田教授の獨擅場と言えるもので、関連する各論には「五姓を説く敦煌資料」(『國立民族學博物館研究報告』別冊14, 1991年)、〈藏文社邑文書二三種〉(《敦煌吐魯番研究》第三卷, 1998年)、〈有關吐蕃期敦煌寫經事業的藏文資料〉(《敦煌文獻論集》遼寧人民出版社, 2001年)、〈吐蕃期敦煌有關受戒的藏文資料〉(《新世紀敦煌學論集》巴蜀書社, 2003年)、〈敦煌的識字水平與藏文的使用〉(《轉型期的敦煌學》上海古籍出版社, 2007年)、〈敦煌的語言生活〉(劉進寶(編)《百年敦煌學 歷史・現狀・趨勢》甘肅人民出版社, 2009年) といった一連の論考があり、敦煌および中央アジアで行なわれた言語生活の諸相を多角的に明らかにした功績は大きい。

## ■音韻史料と中外交流文獻の研究

高田教授の研究の第三の基盤は、中國人自身の手になるいわば内部からの言語觀察の記録と、西歐のとくに宣教師が残した外部からの言語觀察の記録について、東洋と西洋の文獻學の手法を驅使した精密な考證を行ない、言語學的觀點から分析する方向の研究である。前者の研究對象は、廣い意味で中國語音韻史研究の主流に位置づけられる韻書や音註資料などであるが、高田教授は漢文テキストの文字あるいは語をどのように發音するかを指定する音註を施した中國人が、如何なる言語體系のもとでかかる註記を施したのかという觀點から、文字記録の背後にある言語の實體に迫る一連の研究を展開した。「玉篇の敦煌本」(京都大學教養部『人文』33集、1987年)、「玉篇の敦煌本・補遺」(京都大學教養部『人文』35集、1989年)および「慧超『往五天竺國傳』の言語と敦煌寫本の性格」(『慧超往五天竺國傳研究』京都大學人文科學研究所、1992年)、「可洪隨函錄と行珣隨函音疏」(『中國語史の資料と方法』京都大學人文科學研究所、1994年)、〈莫高窟北區石窟發現《排字韻》簡記〉(《敦煌學》第二十五輯、2004年)などである。

以上、『敦煌資料による中國語史の研究』以降に發表された、敦煌の言語史に関わる主要な論文は、中國語譯が《敦煌・民族・語言》(中華書局、2005年)という單著論集に集成された。高田教授の卓越した主要な研究業績が一覧できる同書は、言語史のみならず中央アジア史などの關連分野の研究者にも廣く利用され、中國をはじめとする海外において高い評價を得ている。

また西洋人による漢語の觀察記録の研究では、表音文字による中國語音の記録から當時の言語狀況を闡明した諸論考がある。「近代粵語の母音推移と表記」(『東方學報』72冊、2000年)、「カトリック・ミッションの言語戰略と中國」(『文學』隔月刊第2卷第5號、2001年)、「ジュゼッペ・ロスとロス文庫」(『文學』隔月刊第2卷第3號、2001年)、「トマス・ウェイドと北京語の勝利」(『西洋近代文明と中華世界』京都大學學術出版會、2001年)、〈明末官話調値小考〉(《語言學論叢》第29輯、2004年)、〈《廣州通紀》初探〉(榮新江・李孝聰(主編)《中外關係史新史料與新問題》科學出版社、2004年)、〈SANGLEY 語研究的一種資料〉(陳益源(編)《2009閩南文化國際學術研討會論文集》2009年)、「清末の英語學——鄺其照とその著作」(『東方學』第117輯、2009年)などの多數の研究成果を發表している。こ

の一連の研究は、漢字で記録された漢文の書式と文體に隠されていた言語の實體を、異なる言語と文化の視點で觀察し、表音文字で記録した西歐の資料から分析したものであり、ヨーロッパの諸語に通じた卓越した語學力とヨーロッパの學問と文獻學に對する深い造詣に支えられた斬新な視點からの言語史の再構築は、他の追隨を許さないと言っても過言ではない。

## ■共同研究と教育への貢獻

教育面および研究活動への貢獻においても、高田時雄教授の功績は多大である。昭和56（1981）年より58（1983）年まで小樽商科大学勤務を経て、昭和58（1983）年より京都大学教養部助教授、平成元（1989）年に人文科学研究所に配置換となり、言語史研究部門を擔當、平成9（1997）年に同教授に昇任した。人文科学研究所に移籍して以降は、個人研究の推進とともに共同研究班を組織して、研究交流と學問の深化、後進の育成に盡力されている。

高田教授は京都大学人文科学研究所において研究の柱と位置づけられている共同研究班を二十數年にわたり組織運営してきた。中國語音韻史、近代ヨーロッパとの言語接觸、中央アジアとの文化交流、敦煌學、寫本研究といった言語史と文獻學にかかわる研究班には、テーマごとに關西一圓の中堅、若手研究者が集まり、言語交流史の研究據點が形成された。その成果は『中國語史の資料と方法』そして『明清時代の音韻學』という研究報告書にまとめられたほか、西陲發現中國中世寫本研究班がスタートしてからは、年度ごとの研究成果を『敦煌寫本研究年報』という論集の形で出版し（平成25（2013）年度末までに8冊を刊行）、敦煌學と寫本學にかんする共同研究の最新の成果を世に問い、國內外からの高い注目を集めている。歴代のいずれの研究班においても高田教授は共同研究の組織者、運営者としての指導力を遺憾なく發揮し、若手研究者の育成の場としても多大な貢獻をしている。

## ■ COE プログラム據點リーダーとして

特筆すべきは高田教授が京都大学21世紀 COE プログラム「東アジア世界の

人文情報学研究教育據點」(平成15(2003)年度～平成19(2007)年度)の據點リーダーを務め、大きな成功をおさめたことであろう。同プログラムは「漢字文化の全き継承と発展のために」というタイトルのもとで、漢字文化圏における漢字使用の現状とその変遷、漢字から派生した周辺の文字との有機的な結合、およびそれら諸種の文字を扱うための手法に関する人文學的・情報學的研究を行ない、またそれらに関する知識と技術の教育を行なうことを目標とするプログラムであった。本據點ではその實現に向けて(1)東アジアの文字に関する人文情報學的研究(2)漢字文獻ナレッジベースの構築(3)東アジア人文情報學人材育成プログラムが組織された。その成果は現在、「拓本文字データベース」「京都大學人文科學研究所所藏甲骨文字データベース」「CHISE」(Character Information Service Environment)として京都大學人文科學研究所附屬東アジア人文情報學研究センターのサイトで公開している。また関連するシンポジウムも數多く開催されたなかで、本プログラムの總括として2007年10月には國際シンポジウム「漢字文化三千年」を開催、據點としての研究活動から得られた最新の知見を廣く公開した。寄せられた論考は、のちに高田時雄(編)『漢字文化三千年』(臨川書店、2009年)として刊行された。

## ■學界への貢獻

高田教授は國內の東方學會、日本中國學會、日佛東洋學會などに所屬するほか、國際的には中國敦煌吐魯番學會理事、敦煌學國際聯絡委員會幹事長を務め、國內外の諸學會において活發に研究報告を行ない、敦煌學の分野においては、関連するいくつかの國際學會の主催者として、斯界の研究の發展に大きな貢獻をしてきた。その成果を刊行した編著には『草創期の敦煌學』(知泉書館、2002年)；《轉型期的敦煌學》(上海古籍出版社、2007年)；《涅瓦河邊談敦煌》(京都大學人文科學研究所、2012年)などがあり、いずれも敦煌學と文獻學の最新の研究成果と指針を示すものとして、國際的に高く評價されている。また海外の學術雜誌の編輯委員としても積極的に活動し、ロシア科學アカデミー東洋寫本研究の機關誌 Письменные памятники Востока [東洋の文獻遺産]の海外編輯委員、《中國語言學集刊》の編輯顧問などを務めている。

## 主要な著書および論文の目録

主要な學術上の業績において取り上げた高田時雄教授の著書および主要論文について書誌的に記す。＊印以下は各業績についての解説。

### [單著書]

1988 『敦煌資料による中國語史の研究——九・十世紀の河西方言』（東洋學叢書33）東京：創文社。

2005 《敦煌・民族・語言》北京：中華書局。

＊前者はチベット文字で漢字音を記録した「藏漢對音資料」および関連する音韻資料を用いて（古代）河西方言の實體を描き出した專著であり、後者は『敦煌資料による中國語史の研究』以降に發表された各論から、藏漢對音資料、ウイグル字音、コータン語中の漢語語彙、音韻資料、敦煌の言語生活について、優れて代表的な論考を選び、中國語譯を集成した單著論集。

### [編著書]

1994 『中國語史の資料と方法』（編著）京都大學人文科學研究所。

2001 『明清時代の音韻學』（編著）京都大學人文科學研究所。

2002 『草創期の敦煌學』（編著）東京：知泉書館。

2007 《轉型期的敦煌學》（共編著、中國語）上海古籍出版社。

2009 『漢字文化三千年』（編著）京都：臨川書店。

＊前2著は人文科學研究所共同研究班の研究報告書であり、中2著は高田教授が主催した敦煌學にかんする國際會議の成果を集成した論集。後1著は高田教授が據點リーダーを務めた COE プログラムの總括として行なわれた國際シンポジウムの成果である。

2012 《涅瓦河邊談敦煌》 *Talking about Dunhuang on the Riverside of the Neva*.（編著）京都大學人文科學研究所。

＊2010年9月サンクト・ペテルブルグのロシア科學アカデミー東洋寫本研究所で開催された Roundtable の論文集。日本・ロシアの参加者による論文9編を収録。（中國語・英語）

[目録・索引類]

1995 *Inventaire sommaire des manuscrits et imprimés chinois de la Bibliothèque Vaticane, par Paul Pelliot*. Kyoto: Istituto italiano di cultura, Scuola di studi sull'Asia orientale.

1997 *Supplément à l'Inventaire sommaire des livres chinois de la Bibliothèque Vaticane*. 梵蒂岡圖書館所藏漢籍目錄補編, 京都大學人文科學研究所 東洋學文獻センター叢刊 7.

2006 《梵蒂岡圖書館所藏漢籍目錄》北京：中華書局, 伯希和編；高田時雄校訂、補編.

\* 第1のものはパチカンに所藏される漢籍の目錄で、もとペリオの編になる目錄を校訂し、増補したもの。第2は高田教授自身の編になる補遺。第3は、これら正編と補編を一本にまとめた中國語譯。

1994 『法顯傳索引』（栞山正進と共編）京都大學人文科學研究所 東洋學文獻センター索引叢刊 2.

1999 『西域行記索引叢刊 I 大唐西域記』（栞山正進と共編）京都：松香堂.

2000 『西域行記索引叢刊 II 大唐大慈恩寺三藏法師傳』（栞山正進と共編）京都：松香堂.

2002 『西域行記索引叢刊 III 洛陽伽藍記・法顯傳・釋迦方志』（栞山正進と共編）京都：松香堂.

\* 以上は共同研究班の研究成果の一環として作成した佛教僧の傳記、旅行記、西域關連の漢語文獻の一字索引である。その後これらのデータは「西域行記データベース」として人文科學研究所のウェブサイトに掲載され、學界に大きく裨益している。

2010 『陶湘叢書購入關連資料』京都大學人文科學研究所 東方學資料叢刊17.

\* 京都大學人文科學研究所所藏漢籍の中核をなす陶湘舊藏の叢書一括が舊東方文化學院京都研究所に歸した経緯につき、倉石武四郎書簡および外交史料館所藏の東方文化事業關連のアーカイブ資料を用いて詳しく解説するとともに、關連資料を公刊した。

[その他]

1990 『中國の諸言語』(共譯) 東京：大修館書店.

- \* Robert Ramsey. *The Languages of China*. Princeton University Press. 1992. の邦譯.  
中國語と周邊に話される諸言語について優れて有機的かつ立體的な概説である。

1996 『東洋學の系譜(歐米篇)』(編著) 東京：大修館書店.

- \* 東洋學研究に大きな功績を残した近代ヨーロッパにおける碩學24人の評傳。高田教授自身は「レミュザ」と「クラブロート」を執筆。

2011 『小川環樹 中國語學講義』(編集) 京都：臨川書店.

- \* 中國語學文學の碩學、小川環樹教授の中國語學講義を、尾崎雄二郎教授が臨場感ある語り口を活かして筆録した記録をもとに編集した概説書。

[論文]

1975 「詩經の新古層辨別の一標準」『中國文學報』第25冊. pp.1-10.

- \* 詩經中の押韻において去入聲通用の分布が、詩經各篇の新古を判斷する基準となり得ることを説く。

1985 「ウイグル字音考」『東方學』70. pp.150-134.

- \* トルファン盆地を根據地とした古代ウイグル王國に、漢字音のシステムが存在したことを、幾つかの音註寫本を音韻史的考察により初めて解明した。

1987 Note sur le dialecte chinois de la région du Hexi 河西 aux IXe-Xe siècles. *Cahiers d'Extrême-Asie*, Numero 3. pp.93-102.

- \* チベット語と漢文の兩言語で書かれた會計出納簿の言語的分析から、九・十世紀の河西地域の漢語方言の規範に變動が生じたことを解説する。(フランス語)

1988 「コータン文書中の漢語語彙」『漢語史の諸問題』京都大學人文科學研究所. pp.71-127.

- \* コータン語の世俗文書から、漢語由來の人名、地名、官職名などを拾い出し、音韻史的分析を加え、それらが基本的にコータン・ブラーフミー文字轉寫『金剛經』と同じ音韻特徴を持つことを解明。

1990 「ウイグル字音史大概」『東方學報』京都62. pp.329-343.

- \* ウイグルには字音が存在し、その字音には日本の呉音、漢音、唐音の層別に類した時代による變遷があることを云う。

1991 「五姓を説く敦煌資料」『國立民族學博物館研究報告』別冊14. pp.249-268.

- \* 敦煌遺書の中には、宅經類、具注歷、童蒙書、刊本切韻などに五姓の記載が見られるほか、敦煌チベット文獻には「人姓歸屬五音經」などというものが存在し、五姓説が廣く敦煌の民間に流布し、チベット化した漢人社會にさえ五姓の運用が見られる。
- 1992 「慧超『往五天竺國傳』の言語と敦煌寫本の性格」『慧超往五天竺國傳研究』京都大學人文科學研究所, pp.197-212.
  - \* 新羅の僧慧超のインド旅行記『往五天竺國傳』の寫本が敦煌遺書中に残されているが、その言語の分析および慧琳の一切經音義に引かれた語彙との比較にもとづき、この寫本が慧超の草稿本であることを提示する。
- 1993 「チベット文字書寫「長卷」の研究（本文編）」『東方學報』京都 65, pp.313-380.
  - \* チベット文字で転寫された敦煌漢文文獻として最大の「長卷」テキストを全面的に漢字に還元し、音韻史の資料として提示したもの。研究の結果、表面に書かれたものの多くは佛教の教理問答の類であり、背面のテキストは佛教の讚歌であることが明らかとなった。
- 1994 Bouddhisme chinois en écriture tibétaine: Le Long Rouleau chinois et la communauté sino-tibétaine de Dunhuang. *Bouddhisme et cultures locales, Quelques cas de reciproques adaptations, Actes du Colloque Franco-Japonais de septembre 1991*, EFEO, Paris. pp.137-144.
  - \* 大英圖書館に所藏される、チベット文字転寫のいわゆる「長卷」の内容から出發し、チベット化された漢人社會の存在を推測する。(フランス語)
- 1994 「可洪隨函錄と行瑫隨函音疏」『中國語史の資料と方法』京都大學人文科學研究所, pp.109-156
  - \* 五代時期に北方で作られた佛典音義に可洪の『隨函錄』があり、南方で作られたものに行瑫の『隨函音疏』がある。前者は高麗藏によって傳わったが、後者は失われた。これら二種の音義について、敦煌本を含め今日に傳わる殘卷と佚文を精査し、その音義史上における位置づけを行った。
- 1997 「清代官話の資料について」『東方學會創立五十周年記念東方學論集』, pp.771-784.
  - \* 清朝期に雍正の上諭に基づいて陸續と編纂されたいわゆる「正音書」7種について解説するとともに、清代官話の實態について論じる。
- 1998 〈藏文社邑文書二三種〉《敦煌吐魯番研究》第三卷, pp.183-190.
  - \* 敦煌の社邑文書は漢文で書かれたものが数多く知られているが、チベット語で

書かれた「社條」の存在を初めて指摘した論文。敦煌にチベット語チベット文字を使用する社會集團の存在することを示唆するものとして重要。(中國語)

2000 Multilingualism in Tun-huang. *Acta Asiatica*, 78. pp.49-70.

\* ソグド語、チベット語、コータン語、ウイグル語、梵語など、敦煌遺書にみられるいわゆる胡語文獻の態様を検證し、敦煌における多言語使用がいかなるものであったかを時代に即して實證的に論じる。(英語)

2000 「近代粵語の母音推移と表記」『東方學報』京都72. pp.754-740.

\* 西洋人の残した粵語資料はかなり豊富であり、時代差も存在する。こうした西洋人の表記と、『分韻撮要』など土着の韻書との比較から、19世紀から今日までのあいだに、粵語に大きな母音推移があったことを説く。

2001 「トマス・ウェイドと北京語の勝利」『西洋近代文明と中華世界』京都大學學術出版會. pp.127-142.

\* トマス・ウェイドは最初の北京官話教本『語言自邇集』の編者として著名だが、この論文では清末の言語狀況およびウェイドが北京官話に着目する過程を詳しく論じる。近代中國語發展のダイナミズムを描いたものとして、評価が高い。

2001 〈有關吐蕃期敦煌寫經事業的藏文資料〉《敦煌文獻論集》遼寧人民出版社. pp.635-652.

\* 敦煌の吐蕃支配末期に行われた寫經事業に關するチベット語文獻を解讀し、底本の借用、寫經用紙の供給法、寫し終わった經卷の保存場所など寫經事業の細かな運營實態と、寫經の担い手の多くが漢人部落から「將」ごとに徴發されたことなどを論じる。(中國語)

2001 「ジュゼッペ・ロスとロス文庫」『文學』隔月刊第2卷第3號. pp.1-10.

\* イタリアの外交官で長く中國に住んだジュゼッペ・ロスの生涯と、彼が作り上げた藏書の内容、およびその運命を、豊富な資料によって細かく跡づけた論文。

2001 〈敦煌發現的多種語言文獻〉《敦煌學與中國史研究論集——紀念孫修身先生逝世一周年》蘭州：甘肅人民出版社. pp.348-354.

\* 上記2000. Multilingualism in Tun-huang. の中國語版。

2001 「カトリック・ミッションの言語戰略と中國」『文學』隔月刊第2卷第5號. pp.1-7.

\* 大航海時代以降、世界中に展開したカトリック各派の布教活動には、緻密に計算された言語戰略が存在した。彼らが中國という文明と接觸したときに、いかなる事象が生じたか、またその言語戰略のなかで生み出された中國語に關す

る著作がいかなる性格のものであったかを論じる。

2002 「狩野直喜」『京大東洋學の百年』京都大學學術出版會, pp.4-36.

\* 中國學者狩野直喜の閱歷と學問についての簡明な紹介。

2002 「國際漢學の出現と漢學の變容」『中國——社會と文化』第17号, pp.18-24.

\* 「漢學」という表現の変遷を論じ、あわせて今日、中國を中心に再編されつつある中國學と「國際漢學」との関係、さらにその實状について考察する。

2002 A Note on a 16th Century Manuscript of the “Chinese Alphabet”.  
Antonino Forte, Federico Masini (eds.) *A Life Journey to the East, Sinological Studies in Memory of Giuliano Bertuccioli (1923-2001)*.  
Kyoto : Scuola italiana di studi sull’Asia orientale. pp.165-183.

\* 「中國のアルファベット」としてパチカンに傳わる一寫本が、實は識字教本「上大人」であることを指摘し、それが如何にしてヨーロッパに傳わたったかを、音寫形式などから推定する。(英語)

2003 〈吐蕃期敦煌有關受戒的藏文資料〉《新世紀敦煌學論集》成都：巴蜀書社, pp.266-273.

\* 吐蕃期の敦煌で行われた受戒を記録した文書3點を翻譯紹介し、これらが九世紀の30~40年代(吐蕃支配末期)にカム地方から來た僧統の主宰により受戒が施された時の記録であることを論じる。(中國語)

2003 「敦煌寫本を求めて——日本人學者のヨーロッパ訪書行」『佛教藝術』271号, pp.21-32.

\* かつて日本人學者の多くが英佛に渡航して敦煌寫本の研究に従事したが、それらの調査の内容および研究史上の意義について述べる。

2004 〈《廣州通紀》初探〉榮新江・李孝聰(主編)《中外關係史 新史料與新問題》北京：科學出版社, p.281-287.

\* 《廣州通紀》の題名を冠する一寫本が、實はイエズス會士アレーニの《職方外紀》、フェルビーストの《坤輿圖說》、黃衷の《海語》の三著作を合成して作られたものであることを指摘し、注意深く天主教關係の記述を削除することで、鎖國日本においても流通が可能なように編集されたものと結論づける。(中國語)

2004 〈明治四十三年(1910) 京都文科大學清國派遣員北京訪書始末〉《敦煌吐魯番研究》第7卷, pp.13-27.

\* スタイン、ペリオが藏經洞から敦煌寫本を持ち去った後、清朝學部は残ったす

すべての寫本を北京に送らせた。その知らせを聞いた草創間もない京都文科大学の教官五名が北京に出張して調査に当たったことはよく知られているが、この論文では新たな知見とともに、その顛末を詳しく記述する。(中國語)

- 2004 The Chinese Language in Turfan with a Special Focus on the Qieyun Fragments. *Turfan Revisited - The First Century of Research into the Arts and Culture of the Silk Road*. Berlin: Dietrich Reimer Verlag, pp.333-340.

\* トルファン発見の切韻斷片が寫本および刊本の二種からなることを述べ、切韻系韻書の發展中に占めるそれぞれの位置を明らかにする。とくにトルファンの刊本切韻は《廣韻》よりもさらに注文の多い坊刻本であったことを指摘する。(英語)

- 2004 〈莫高窟北區石窟發現《排字韻》簡記〉《敦煌學》第25輯（潘重規先生逝世週年紀念專輯）。pp.303-310.

\* いわゆる莫高窟北區から発見された版心に「排字勻」とある一斷片が、金代の王文郁《新刊韻略》であることを初めて證明し、これまでの誤解を解消した。(中國語)

- 2004 〈近代日本之漢籍收藏與編目〉《2004年古籍學術研討會論文集》台灣：輔仁大學出版。pp.1-26.

\* 近代日本における圖書館あるいは個人の漢籍コレクションについて歴史と現状を述べ、それらコレクションの漢籍目録にいかなるものがあるかを解説する。さらに展覧目録、賣立目録、古書店目録など多様な目録についても觸れる。(中國語)

- 2004 〈明末官話調値小考〉《語言學論叢》第29輯。pp.145-150.

\* バチカンに所藏される「漢＝ラテン字書」の一寫本に附された「使用法」の中に官話の聲調を音樂の五線譜で記したものがある。それに基づいて明末官話の調値を復原する。(中國語)

- 2006 「玄應音義について」『玄應撰一切經音義二十五卷』（日本古寫經善本叢刊第1輯）解説冊。國際佛教學大學院大學學術フロンティア實行委員會。pp.1-8.

\* 玄應音義の成立について論じ、その中國佛典音義史に占める位置づけをおこなったもの。

- 2006 A Note on the Lijiang Tibetan Inscription. *Asia Major*. Vol.19- 1/2, 2006. pp.161-170.

- \* 雲南省麗江に保存される唐代のチベット碑文を解讀し、それが南詔國によって作られたものであること、またその背後にある民族關係について論じる。(英語)
- 2007 「李滂と白堅——李盛鐸舊藏敦煌寫本日本流入の背景」『敦煌寫本研究年報』創刊號, pp.1-26.
  - \* 現在武田科學振興財團杏雨書屋に所藏される李盛鐸舊藏敦煌寫本が、如何にして日本に渡ったかを、李滂と白堅という二人の當事者を通じて解明したもので、これまでの研究の盲點を突いた興味ある論考。
- 2007 〈金楷理傳略〉《日本東方學》第1輯, 北京: 中華書局, pp.260-276.
  - \* 清末のお雇い外國人金楷理(Karl Kreyer)につき、アメリカのパプティスト・ミッション文書館に所藏される檔案資料、およびジェノアのキヨソネ美術館に保管される彼の個人藏書などを資料として、初めてその閱歷を明らかにした。(中國語)
- 2007 「非漢字から見た漢字文化」『月刊言語』第36卷第10號, pp.48-55.
  - \* 歷史上、チベット文字、パスパ文字、ローマ字、アラビア文字などの漢字以外の文字で中國語を書き記した事例を紹介し、漢字の表語的性格が方言の相違を克服して中國社會を統合する機能を果たしていることを解説。
- 2007 〈敦煌的識字水平與藏文的使用〉《轉型期的敦煌學》上海古籍出版社, pp.599-615.
  - \* 敦煌の漢字識字率の相對的低さという条件を視野に入れつつ、具體的資料を取り上げて漢人住民がチベット文字を學習し、利用するにいたった過程を論じる。(中國語)
- 2008 「李滂と白堅(補遺)」『敦煌寫本研究年報』第2號, pp.185-190.
  - \* 上の2007「李滂と白堅」について、新たな資料を用いて補足したもの。
- 2008 「大唐三藏玄奘法師表啓に關する一問題——玄奘と長命婆羅門」『佛教文獻と文學——日臺共同ワークショップの記録2007』東京: 國際佛教學大學院大學學術フロンティア實行委員會, pp.219-230.
  - \* 玄奘のいわゆる「表啓」中に現れる長命婆羅門が王玄策の連れ歸ったナーラーヤナスヴァーミンと同一人物であることを論じ、玄奘が唐とインドとの外交において果たした役割について論じる。
- 2008 「内藤湖南の敦煌學」『東アジア文化交渉研究』別冊3, pp.19-

36.

- \* 初期の敦煌學形成に果たした内藤湖南の貢獻につき、新たな資料を用いて具體的に檢證する。

2008 Japanese Researchers of Russian Collections. *Russian Expeditions to Central Asia at the Turn of the 20th Century*. S St.Petersburg : Slavia. pp.176-187.

- \* ロシア探險隊が新疆などからもたらした寫本と日本人學者が如何に關わったかを檢證。(英語)

2009 「清末の英語學——鄺其照とその著作」『東方學』第117輯，平成21年，pp.1-19.

- \* 清末に英漢辞典や多數の英語學書を公刊した鄺其照の事蹟と著作について、米國に保存される檔案資料および鄺氏の著作を網羅的に調査することで、この人物の實像および閱歷をはじめて解明した。

2009 「ロシアの中央アジア探險隊所獲品と日本學者」『シルクロード文字を辿って——ロシア探險隊の文物』京都國立博物館，pp.25-31.

- \* オルデンプルグやコズロフを初めとするロシア探險隊のもたらした文獻と日本學者の關わりについて、檔案資料などを用いて概觀する。

2009 「〔解説〕平定西域戰圖」『乾隆得勝圖平定西域戰圖』京都：臨川書店，18p.

- \* 乾隆帝がフランスに發注した西域戰圖の銅版畫につき、背景となる西域征服戰爭の經緯を解説し、さらに新發見の資料を用いて銅版畫の構想、發注、制作の各段階、および銅版畫の所在に關して詳しく論述を加えた。

2009 「漢字の西方波及」高田時雄（編）『漢字文化三千年』京都：臨川書店，平成21年，pp.255-275.

- \* 唐代以前の漢字で書かれた碑文や寫本などが、中央アジア及びさらなる西方にどれだけ殘存しているかを跡づけつつ、漢字の西方波及の歴史的背景を述べる。

2009 〈SANGLEY 語研究的一種資料〉陳益源（編）《2009閩南文化國際學術研討會論文集》台灣：國立成功大學中國文學系；金門縣文化局，pp.663-671.

- \* 16世紀末のフィリピンで華人によって使用された SANGLEY 語（閩南語の一種）をスペイン語で解説した語彙集について、その作者と傳來の經緯を解説し、中

國語方言史の資料としての定位を試みる。(中國語)

- 2009 「〔解説〕平定臺灣戰圖』『乾隆得勝圖平定臺灣戰圖』京都：臨川書店，16p.

\* 乾隆帝が臺灣平定戰爭を記念して作成させた銅版畫について歴史的背景をふくめ解説する。

- 2009 〈敦煌的語言生活〉劉進寶（編）《百年敦煌學 歷史・現狀・趨勢》蘭州：甘肅人民出版社，pp.320-325.

\* 多言語使用、方言と標準語の關係、文字學習の實態など、古代敦煌において生じた言語生活に関わる基本問題を提示する。(中國語)

- 2010 「藏經音義の敦煌吐魯番本と高麗藏」『敦煌寫本研究年報』第4號，pp.1-13.

\* 玄應、慧苑、慧琳、可洪、希麟といった唐から五代にかけて製作された音義の敦煌吐魯番本の様相を提示し、それらの質的變化が、藏經が寫本から刊經に移っていく過程と表裏一體のものであることを指摘し、同時にこれら音義の傳存に高麗藏の果たした役割を指摘したもの。

- 2010 〈宋刊本《周易集解》的再發現〉《國際漢學研究通訊》第2期，pp.138-147.

\* かつてベルリン國立圖書館に所藏されていた宋刊本『周易集解』が現在ポーランドのクラクフに現存することを報告し、併せてこの書がヨーロッパにもたらされた経緯および大戰後の流傳を詳細に辿る。(中國語)

- 2010 〈Khumdan 的對音〉《張廣達先生八十華誕祝壽論文集》台北：新文豐出版公司，pp.965-973.

\* ギリシャ語、シリア語、アラビア語、ペルシャ語、ソグド語などで長安を意味する語詞フムダーン Khumdan についてはさまざまな説が行われてきたが、古代の地名「咸陽」に由來することを音韻史の觀點から論證した。(中國語)

- 2010 「避諱と字音」『東方學報』京都85，pp.702-694.

\* 唐代に高宗の諱を避けて「治」字をり音に讀んだ國諱の事例と、「裸」をう音ではなくクワ音に讀んだ俗諱の場合を取り上げ、避諱の慣習が字音に影響を及ぼすことを論じた。

- 2011 「李盛鐸舊藏寫本《驛程記》初探」『敦煌寫本研究年報』第5號，pp.1-13.

\* 現在武田科學振興財團杏雨書屋に所藏される李盛鐸舊藏敦煌寫本斷簡「驛程記」の地名及び内容を考證し、それが歸義軍節度使から中原王朝への公的使節の旅

程記録で、その途上に五臺山を參詣したことを跡づける。

- 2011 〈中尊寺本金銀泥字《大唐西域記》の舊藏者——明治時期日本古籍流出の一例個案研究〉《國際漢學研究通訊》第3期, pp.143-151.

\* 中尊寺本金銀泥字「大唐西域記」は明治期に高野山から民間に流出し、大正新修大藏經の校訂に用いられたことで、はじめてその存在が知られた。その所藏者とされる松本初子について詳しく考證したうえ、この寫卷の傳承を明らかにし、併せて明治期の古典籍流出の容態を論じる。(中國語)

- 2011 〈《大唐西域記》卷第十一増入部分小考〉鄭阿財(等著)『佛教文獻與文學』高雄：佛光文化事業, pp.21-42.

\* 明代以降の「大唐西域記」卷第十一「僧伽羅國」條には鄭和によるスリランカ攻撃及び同國王「阿烈苦奈兒」捕縛の記事が増入されているが、諸本を博搜して増入が永樂南藏本に始まることを實證し、増入部分とほぼ同一のテキストが永樂のカルマパ五世に與えた勅書に見えること、さらに永樂時期の鄭和の事蹟などにに基づき、増入が鄭和自身の關與によってなされたことを論じる。(中國語)

- 2011 〈平定西域戰圖解説〉譚皓(譚)《西域文史》第6輯, pp.301-313.

\* 上述の2009「〔解説〕平定西域戰圖」の増補新訂版。(中國語)

- 2012 「新出の行瑠『内典隨函音疏』に關する小注」『敦煌寫本研究年報』第6號, pp.1-12.

\* 行瑠『内典隨函音疏』はこれまで京都國立博物館所藏卷三百七(守屋孝藏舊藏)が唯一の現存例として知られていたが、近年北京のオークションに新たに卷二百六十四が出現した。本文では現所藏者から提供された寫眞に基づき、新出寫本の解説を行うとともに、『音疏』の依據した藏經について論じ、日本に所藏される別本についても觸れる。

- 2012 〈俄藏利瑪竇《世界地圖》札記〉北京大學中國古代史研究中心(編)《輿地、考古與史學新說 李孝聰教授榮休紀念論文集》北京：中華書局, pp.593-604.

\* マテオリッチの萬曆30年版「世界地圖」は現存するものが少ないが、サンクト・ペテルブルグの國立圖書館にこれまで知られない完本の存在することを報告し、その來歴を紹介する。また組み合わせ版木の構成について新たな知見を提供するほか、版木の部分補修狀況から諸本間の印刷年代の前後を推測する。(中國語)

- 2012 「〔解説〕平定廓爾喀戰圖」『乾隆得勝圖平定廓爾喀戰圖』京都：臨川書店, pp.1-21.

- \* 乾隆がグルカ（ネパール）平定戦争の各場面を描かせた銅版畫につき、その歴史的背景を詳しく解説する。
- 2012 Qianlong Emperor's Copperplate Engravings of the "Conquest of Western Regions". *Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko*, No.70. pp.111-129.
- \* 上掲「〔解説〕平定西域戦圖」（2009）の増補新訂版。（英語）
- 2013 On the Emendation of the Datang Xiyuji during Gaozong's Reign: An Examination Based on Ancient Japanese Manuscripts. Imre Galambos (ed.) *Studies in Chinese Manuscripts: From the Warring States Period to the 20th Century*. Budapest: Institute of East Asian Studies, Eötvös Loránd University. pp.49-58.
- \* 宋代以降の刊本大藏經の「大唐西域記」テキストと日本古寫本のテキストを比較することで、高宗期に字句の組織的改變が行われたことを論じ、同時にこの改變がさして大きなものではありえず、7世紀には草稿本（繁本）と進呈本（定本）二種の「西域記」が存在したことを推測する。（英語）
- 2013 La contribution de Paul Pelliot à la sinologie dans la perspective des savants japonais. *Paul Pelliot: de l'histoire à la légende*. Paris: Académie des inscriptions et belles-lettres. pp.327-335.
- \* ペリオ中亞探検百周年シンポジウムにおける報告。日本學者とペリオの最初の接觸からはじめて、日本學者から見たペリオの中國學に對する貢獻と評價につき述べる。（フランス語）

（以上、2013年刊行分までの主要な研究業績を收録）